

救済が成り立つことを述べられたものである。しかるにここに「三部経大意」(『親鸞聖人全集』享信篇2・九頁以下)の「観経」の説法下において、十二・十七・十八・十三の四願について、説かれていることが注意を引くのである。即ち親鸞が「教行信証」において重要な地位を持つ本願とし説かれた、真実の五願中の四願までが、源空においてすでに詳細に説かれているのである。しかも親鸞はこれを伝統して、「教行信証」の組織構造において展開し、以て第十七願によって「行巻」を頭わし、第十八願に基いて「信巻」を立て、第十一願に立場して「証巻」を説き、十二・十三の二願を依拠として「真仏土巻」を頭わすという、かの五願分相門の已証的法門を開示されたのであった。

しかるに親鸞の晩年の書簡においては、一願該撰門の立場が強調され、第十七願は明瞭に「方便の御誓願」(『親鸞聖人全集』書簡篇一五五頁)と説き給い、以て第十八願を往相廻向の正業正因の本願と顯示せられているのである。もちろん十七・十八の二願を共に真実の本願とする、五願分相の立場を述べられる書簡も一通はあるのである。ところで親鸞が晩年において、かく一願該撰門の立場を強調せられる理由を研究してみるに、これは恐らく善鸞の義絶状に示される異義が原因なのであろうか。善鸞の異義とは、第十八願を萎める花に喩えて、第十八願を捨てたのである。いわゆる第十八願を萎める花に喩えたのは、すでに此の本願を不用なるものとして、これにかわる新本願説を立てたためであると推定される。そしてかかる新本願は、恐らく第十七願であろうかと推定されるのである。ところで宗祖はかかる異義を匡正するために、第十八願の一願該撰門の立場を強

調せられ、かつ第十七願を方便の誓願とし、しかもその叙説においては、源空の「三部経大意」の第十七願の叙説が、依用せられているのが注意を引くのである。

親鸞聖人御伝鈔本文の異同について

藤 谷 一 海

覚如上人に依って、わが宗祖の一代を叙述せられた、いわゆる御伝鈔については、その初稿は、慈俊の「慕婦絵詞」(第五巻第二段)や、自筆康永本御伝鈔奥書等に見えるように、伏見天皇の永仁三年十月十二日になり、それより四十八年を経て再び覚師に依り執筆完成されたものであるが、その間、再三修正増補がなされたもののようである。

即ち、初稿本成立より二ヶ月後永仁三年十二月十三日に写された専修寺本「善信聖人親鸞伝絵」は、上巻六段、下巻七段の上下十三段であるのに、西本願寺本「善信聖人絵」二巻は、上巻に入西房鑑察の段を加えて、上七、下七の十四段となって居り、更に最後の康永本では上巻に更に蓮位夢想を加えて、上八、下七の上下十五段となって居る。この形は恐らくかの康永本の奥書に見える暦応二歳の「先年愚草之後一本所持之处、世上闕乱之間、炎上之刻焼失不知行方而今不慮得荒本註留之者也耳、桑門宗昭」とある事よりして、この暦応二年に出来上ったものであって、かの康永本は最後にこれを自筆清書せられたも

のであらうと思う。

このようにして幾度となく修正せられたものを、更に門弟らがさかんに伝写したので、その異本の種類も数多に及んだ事であるが、故日下師の「総説親鸞伝絵」には、全国的に有名なものを調査して、可成り沢山列挙して、更にその中で特に有名な、(一)東本願寺の康永覚師自筆本、(二)西本願寺の「善信聖人絵」、(三)専修寺の初稿写本「善信聖人親鸞伝絵」、(四)千葉県照願寺の重訂写本「本願寺親鸞聖人伝絵」、(五)東本願寺の弘願本「本願寺聖人親鸞伝絵」について、著者は一々原本にあたつて、更に之に流布本をも列べて各々一段ごとに列挙していられる。

私は更にこれらに江州野洲荒見開光寺本をも列べて、一々比較対象して見た。この蓮師は寛正五年冬、この寺に御滞在在中にお認めになったものと伝えるが、その仮名遣及び筆蹟などより見て、蓮師の真写に間違ないと思うものである。

今これらを較べて見ると、その一本一本にそれぞれ特徴があつて全く同一のものは一つもない。即ち文中漢字が仮名になつていたり、反対に仮名が漢字になったり、また仮名遣が違つていたりいろいろであつて、例えば

上の三段 夢悟をはりぬ(康永本)、夢悟畢(西本願寺本照願寺本、夢悟了(専修寺本)、夢悟をはりんぬ()、ゆめさめ畢(流布本蓮師本)。

上の三段 然者聖人後時(康永、西本專本本)、然者聖人後の時(照本)、然は聖人後時(弘願本)、しかれば聖人後るとき(流布、蓮本) 上の三段 おほせられてのたまはく(康永、弘願、蓮本)、被仰云(西本、專本照本)、おほせられて云(流布)。

上の三段 すなわち(浄土の)(康永、弘願、すなはち(浄土の)(照願流布、蓮本、則(浄土の)(西本、則ち(浄土の)(専本)。

上の三段 すなはち(儲君の)(康永、照願流布、蓮本、すなわち(儲君の)(弘願、則(儲君の)(西本專本)。

この如く、仮名などもまちまちで殆ど一本一本別々であり、殊に真筆本に於てすら、同段中に、すなわち、すなはちの如く両用してあるという有様である。

各巻を通じて、仮名交じり文中に、問云、可謂、云云云義、明哉、如斯、今与、所奉拝被仰云のように漢文語調の文字がそのまま取り入れられてあるところ、既(に)、改(め)て、給(ひ)き、傾(き)たる、刷(ふ)ことのように送り仮名のしていないもの、また、あつても完全でないものが非常に多い。そのうち西本願寺本は殊にこの傾向が甚だしい。なお西本願寺本には上一段五十五字下五段五十一字の欠文がある。

このように諸本まちまちであるが、大体その中、真本系(真筆及びその写本類)と流布本系との相違として一貫したものを次に三つ挙げる事が出来る。

その第一は上巻末尾の結文、流布本の「枯文、流布本の「枯」の凡惑をうるほさんがためなり」の「うるほさん」がためなり」は真本系にあつては「うるほさんとなり」(西本願寺本の「調さんとすといふ事」となる)であり、第二は下巻箱根靈告の段、流布本の「いとことなく、いであひたてまつりて」は、真本系「いとことなく、いであひたてまつりて」であり、その第三は下巻熊野靈告の段、三経の証文を挙げたる次、流布本、「何(れ)の文によ」とも一向専念の義立すべからざるぞや」を、真本系では、

康永本真筆本、弘願本、照願寺本

何の文によりて専修の義を(照願寺本)立すべからざるぞや、

西本願寺本

何の文証によりて一向専修の義立すべからざるぞや。

専修寺本

何の文によりて一向専修の義立すべからざるぞや。

のように、真本系はいずれも「何の文によりて」である。

このうち、第一第二はそれ程大した意味の相違はないが、第三に就いては大変な意味の相違である。もし流布本の如く、三經の文証を引いて後、「いづれの文によると、一向専念の義を立すべからざるぞや」となれば、三經の引文に依りて一向専修の義を打消し更に「ぞ」、「や」の二つの助詞に依りて一層強く打消した事になる。これでは真宗の宗義は全く成り立たない事になるが、幸に真本系のものは「何の文によりて云々」と反語になって、三經の何れの文に依りて見ても専修の義の立たない事はあるか、立つてはいないと、真正面に専修の義を押し立てているので問題はないのである。

ところが問題は実際の場合で、今全国の末寺が毎年報恩講などに拝読しているのは、恐らく十中八九までは、この流布本系であって、それらは何れもこの誤りを犯しているのである。故に流布本系を以て一般に拝読する場合は、是非この所は「何の文によりて云々」と流布本の文を改めて拝読する必要がある。

因みに聞光寺の蓮師真写本も、このところ流布本の本文と同様で異なるところがない。

存覚師筆三經延書に就いて

佐々木 求己

聖教の延書は他門に比して真宗は多いと言はれ、事実、聖教延書の古写本も、必ずしも少くはない。併し、三經延書の古写本は、小浜毫撰寺の乗專筆と言はれる大經延書等があるが、あまり多いとは言へない。親鸞加點の本よりの写しと伝へる本もある事であるから、当然、延書本の古写本がもっと多くともよい筈であるが、不思議に少ない。小生は今、この少ない三經延書の伝統の正しい、然も、史料の少ない存覚と仏光寺了源の關係を示す一本を紹介したい。

昭和三十五年に法藏館より出版された真宗聖典二卷は、底本に就いては比較的責任のある本であるが、その中の三經延書は真宗寺藏、弘化四年写の弘宣筆の七卷本に拠つてゐる。この本は江戸末期の新しい写本であるが、その多くの奥書に拠れば、系統の正しい本であり、聖典の編者は写誤も少ないと言ふ。此の本の系統を、その奥書により示せば次の如くなる。

